

饑餓陣營

一幕

宮沢賢治

青空文庫

人物 バナナン大将。

特務曹長、

曹長、

兵士、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十。

場処 不明なるも劇中マルトン原と呼ばれたり。

時 不明。

幕あく。

砲弾ほうだんにて破損せる古き穀倉の内部、辛からくも全滅ぜんめつを免まぬかれしバナナン軍団、マル

トン原の臨時幕営ばくえい。

右手より曹長先頭にて兵士一、二、三、四、五、登場、一列四壁しへきに沿いて行進。
曹長「一時半なのにどうしたのだろう。

バナナン大将はまだやってこない

胃時ストマクウオツチ計はもう十時なのに

バナナン大将は帰らない。」

正面壁に沿い左向き足踏みあしふ。

(銅鑼どらの音)

左手より、特務曹長並ならびに兵士六、七、八、九、十 五人登場、一列、壁に沿いて行進、

右隊足踏みつつ挙手の礼 左隊答礼。

特務曹長「もう二時なのにどうしたのだろう、

バナナン大将はまだ来ていない

ストマクウオッチはもう十時なのに

バナナン大将は帰らない。」

左隊右壁に沿い足踏み (銅鑼)

曹長特務曹長 (互たがに進み寄り足踏みつつ唱うたう)

「糧りょう食しょくはなし 四月の寒さ

ストマクウオッチももうめちやめちやだ。」

合唱「どうしたのだろう、バナナン大将

もう一いっぺん遍べんだけ 見て来よう。」別々に退場

(銅鑼)

右隊登場、総すべて始めのごとし。可かなりつか成疲れたり。

曹長 「もう四時なのにどうしたのだろう、

バナナン大將はまだ来ていない

もう四時なのにどうしたのだろう。

バナナン大將は帰らない。」

左隊登場

「もう四時半なのにどうしたのだろう、

バナナン大將はまだ来ていない

もう五時なのにどうしたのだろう

バナナン大將は 帰らない。」

(銅鑼)

曹長特務曹長

「大將ひとりでどこかの並木なみぎの

りんごりんごを叩たたいているかもしれない

大将いまごろどこかのはたけで
にんじん
 人、蔘ガリガリ 噛かんでるぞ。」

(銅鑼)

右隊入場、著いちじるしく疲れ辛かろうじて歩行す。

曹長「七時半なのにどうしたのだろう

バナナン大将はまだ来ていない

七時半なのにどうしたのだろう

バナナン大将は 帰かえらない。」

左隊登場 最つ労かれたり。

曹長特務曹長

「もう八時なのにどうしたのだろう

バナナン大将は まだ来ていない。

もう八時なのにどうしたのだろう

バナナン大将は 帰かえらない。」

(銅鑼)

立てるもの合唱（きれぎれに）

「いくさで死ぬならあきらめもするが

いまごろ餓えて死にたくはない

ああただひとときれこの世のなごりに

バナナかなにかを 食いたいな。」

（共に倒る）（銅鑼）

バナナ大将登場。バナナのエボレットを飾り菓子かぎの勲章くんしょうを胸みたに満せり。

バナナ大将

「つかれたつかれたすつかりつかれた

脚あしはまるつきり 二本のステッキ

いったいすこうし飲み過ぎたのだし

馬肉もあんまり食いすぎた。」

（叫ぶ。）「何だ。まつくらじやないか。今ごろになってまだあかりも点けんのか。」

兵士等辛うじて立ちあがり挙手の礼。

大将「灯あかりをつけろ、間まぬ抜けめ。」

曹長点燈す。兵士等大将のエボレット勲章等を見て食せんとするの衝動甚し。

大将「間抜けめ、どれもみんなまるで泥人形だ。」

脚を重ねて椅子に座す。ポケットより新聞と老眼鏡とを取り出し殊更に顔をしかめつつこれを読む。しきりにゲップす。やがて睡る。

曹長（低く。）「大将の勲章は実に甘そうだなあ。」

特務曹長「それは甘そうだ。」

曹長「食べるというわけには行かないものでありますか。」

特務曹長「それは蓋しいかない。軍人が名誉ある勲章を食ってしまうという前例はない。」

曹長「食つたらどうなるのでありますか。」

特務曹長「軍法会議だ。それから銃殺にきまつている。」間、兵卒一同再び倒る。

曹長（面をあぐ。）「上官。私は決心いたしました。この饑餓陣営の中に於きましては最早私共の運命は定まつてあります。戦争の為にでなく飢餓の為に全滅するばかりであります。かの巨大なるバナナ軍団のただ十六人の生存者われわれもまた死ぬばかりであります。この際私が將軍の勲章とエボレットとを盗みこれを食しますれば私共は死ななくても済みます。そして私はその責任を負つて軍法会議にかかりまた銃殺されようと

「思います。」

特務曹長「曹長、よく云つて呉れた。貴様だけは殺さない。おれもきつと一いっしょ緒に行くぞ。

十の生命の代りに二人の命を投げ出そう。よし。さあやろう。集まれつ。気を付けつ。

右いおい。直れつ。番号。」

兵士「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、」

特務曹長「よし。閣下はまだおやすみだ。いいか。われわれは軍律上少しく変則ではある

がこれから食事を始める。」兵士よろこ悦ぶ。

曹長（一足進む。）

特務曹長「いや、盗むというのはいかん。もつと正々堂々とやらなくちやいけない。いい

か。おれがやろう。」

特務曹長バナナン大將の前に進み直立す。曹長以下これに従い一列に並ならぶ。

特務曹長（挙手、叫ぶ。）「閣下！」

バナナン大將（徐おもむろに眼を開く。）「何じや、そうぞうしい。」

特務曹長「閣下の御勲功は実に四海を照すのであります。」

大將「ふん、それはよろしい。」

特務曹長「閣下の御名譽は則ち私共の名譽であります。」

大将「うん。それはよろしい。」

特務曹長「閣下の勲章は皆実に立派であります。私共は閣下の勲章を仰ぎます。ことに実に感激してなみだがでたりのが鳴つたりするのであります。」

大将「ふん、それはそうじやろう。」

特務曹長「然るに私共は未だ不幸にしてその機会を得ず。充分適格に閣下の勲章を拝見するの光榮を所有しなかつたのであります。」

大将「それはそうじや、今までは忙がしかつたじやからな。」

特務曹長「閣下。この機会をもちまして私共一同にとくとお示しを得たいものであります。」

大将「それはよろしい。どの勲章を見たいのだ。」

特務曹長「一番大きなやつから。」

大将「これが一番大きいじや。ロンテンブナル勲章じや。」胸より最大なる勲章を外し特務曹長に渡す。

特務曹長「これはどの戦役でござ受領なされたのでありますか。」

大将「印度戦争だ。」

特務曹長「このまん中の青い所はほんもののザラメでありますか。」

大将「ほんとうのザラメとも。」

特務曹長「実に立派であります。」（曹長に渡す。曹長兵卒一に渡す。兵卒一直ちにこれを嚙下す。）

特務曹長「次のは何でありますか。」

大将「フアンテプラーク章じゃ。」外す。

特務曹長「あまり光つて眼がくらむようであります。」

大将「そうじゃ。それは支那戦のニコチン戦役にもらったのじゃ。」

特務曹長「立派であります。」

大将「それはそうじゃろう」（兵卒二これを嚙下す。）

大将「どうじゃ、これはチベット戦争じゃ。」

特務曹長「なるほど西藏馬のしるしがついて居ります。」（兵卒三これを嚙下す。）

大将「これは普仏戦争じゃ、」

特務曹長「なるほどナポレオンポナパルドの首のしるしがついて居ります。然し閣下は普

仏戦争に御参加になりましたのでありますか。」

大将「いいや、六十銭で買ったよ。」

特務曹長「なるほど、実に立派であります。六十銭では安すぎます。」

大将「うん、」（兵卒四これを嚙下す。）

特務曹長「その次の勲章はどれでありますか。」

大将「これじゃ、」

特務曹長「これはどちらから贈おくられたのでありますか。」

大将「それはアメリカだ。ニューヨウクのメリケン粉株式会社から贈られたのだ。」

特務曹長「そうでありますか。愕おどろくべきであります。」

（兵卒五これを嚙下す。）

特務曹長「次はどれでありますか。」

大将「これじゃ、」

特務曹長「実にめずらしくあります。やはり支那戦争でありますか。」

大将「いいや。支那の大将と豚ぶたを五匹ひきでとりかえたのじゃ。」

特務曹長「なるほど、ハムサンドウィッチですな。」（兵卒六これを嚙下す。）

大将「これはどうじゃ。」

特務曹長「立派であります。何勲章でありますか。」

大将「むすこからとりかえしたのじゃ。」（兵卒七嚙下。）

特務曹長「その次は、」

大将「これはモナコ王国に於ておいばくちの番をしたとき貰もらったのじゃ。」

特務曹長「はあ実に恐おそれ入ります。」（兵卒八嚙下。）

大将「これはどうじゃ。」

特務曹長「どこの勲章でありますか。」

大将「手製じゃ手製じゃ。わしがこさえたのじゃ。」

特務曹長「なるほど、立派なお作であります。次のを拝見ねがいます。」（兵卒九嚙下。）

大将「これはなアフガニスタンでマラソン競争をやつてとつたのじゃ。」（兵卒十嚙下。）

特務曹長「なるほど次はどれでありますか。」

大将「もう二つしかないぞ。」

特務曹長（兵卒を検して）「もう二つで丁度いいようであります。」

大将「何が。」

特務曹長（烈しくごまかす。）「そうであります。」

大将「勲章か。よろしい。」（外す。）

特務曹長「これはどちらから贈られましたのでありますか。」

大将「イタリヤごろつき組合だ。」

特務曹長「なるほど、ジゴマと書いてあります。」（曹長に）「おい、やれ。」（曹長嚙下す。）

特務曹長「実に立派であります。」

大将「これはもつと立派だぞ。」

特務曹長「これはどちらからお受けになりましたのでありますか。」

大将「ベルギ戦役マイナス十五里進軍の際スレンジングトンの街道で拾ったよ。」

特務曹長「なるほど。」（嚙下す。）「少し馬の糞ふんはついて居りますが結構であります。」

大将「どうじゃ、どれもみんな立派じゃろう。」

一同「実に結構であります。」

大将「結構でありました？ いかんな。物の云いようもわからない。結構でありますと云

うもんじゃ。ありましたと云えば過去になるじゃ。」

一同「結構であります。」

特務曹長「ええ、只今ただいまのは実は現在完かんりよう了りょうのつもりであります。ところで閣下、この

好機会をもちまして更に閣下の燦爛さんらんたるエボレットを拝見いたしたいものであります

。

大将「ふん、よかろう。」

(エボレットを渡す。)

特務曹長「実に甚はなはだしくあります。」

大将「うん。金無垢きんむくだからな。溶とかしちやいかんぞ。」

特務曹長「はい大丈夫だいじょうぶであります。後列の方の六人でよく拝見しろ。」(渡す。最後の

六人これを受けとり直ちに一箇ずつちぎる。)

大将「いかん、いかん、エボレットを壊こわしちやいかん。」

特務曹長「いいえ、すぐ組み立てます。もう片つ方拝見いたしたいものであります。」

大将「ふん、あとですつかり組み立てるならまあよかろう。」

特務曹長「なるほど金無垢であります。すぐ組み立てます。」(一箇をちぎり曹長に渡す。

以下これに倣ならう。各皮おのおのを剥むく。)

大将（愕く。）「あついかんいかん。皮を剥いてはいかんじや。」

特務曹長「急ぎ呑み下せいおいつ。」（一同嘔下。）

大将（泣く。）「ああ情けない。犬め、畜生ども。泥人形ども、勲章をみんな食
い居つたな。どうするか見ろ。情けない。うわあ。」

（泣く。）（兵卒 悄然たり。）

（兵卒らこの時漸く饑餓を回復し良心の苛責に勝えず。）

兵卒三「おれたちは恐ろしいことをしてしまつたなあ。」

兵卒十「全く夢中でやつてしまつたなあ。」

兵卒一「勲章と胃袋にゴム糸がついていたようだったなあ。」

兵卒九「將軍と国家とにどうおわびをしたらいいかなあ。」

兵卒七「おわびの方法が無い。」

兵卒五「死ぬより仕方ない。」

兵卒三「みんな死のう、自殺しよう。」

曹長「いいや、みんなおれが悪いんだ。おれがこんなことを発案したのだ。」

特務曹長「いいや、おれが責任者だ。おれは死ななければならぬ。」

曹長「上官、私共二人はじめの約束やくそくの通りに死にましよう。」

特務曹長「そうだ。おいみんな。おまえたちはこの事件については何も知らなかった。悪いのはおれ達二人だ。おれ達はこの責任を負って死ぬからな、お前たちは決して短気なことをして呉くれるな。これからあともよく軍律を守って国家のためにつくしてくれ」

兵卒一同「いいえ、だめであります。だめであります。」

特務曹長「いかん。貴様たちに命令する。將軍のお詞ことばのあるうち動いてはならん。気を付けっ。」兵卒等直立。

特務曹長「曹長、さあ支度したくしよう。」（ピストルを出す。）「祈いのろう。一所に。」

特務曹長「饑餓陣營のたそがれの中

犯おかせる罪はいとも深し

ああ夜のそらの青き火もて

われらがつみをきよめたまえ。」

曹長「マルトン原のかなしみのなか

ひかりはつちにうずもれぬ

ああみめぐみのあめを下し

われらがつみをゆるしたまえ。」

合唱「ああ、みめぐみの雨をくだし

われらがつみをゆるしたまえ。」

(特務曹長ピストルを擬し將に自殺せんとす。)

(バナナン大將この時まで瞑目したるも忽ちにして立ちあがり叫ぶ。)

大將「生まれ、やめい。」

(特務曹長ピストルを擬したるまま呆然として佇立す。大將ピストルを奪う。)

バナナン大將「もうわかった。お前たちの心底は見届けた。お前たちの誠心に較べてはお

れの勲章などは実に何でもないじや。

おお神はほめられよ。実におん眼からみそなわすならば勲章やエボレットなどは瓦礫に

も均しいじや。」

特務曹長「將軍、お申し訳けのないことを致しました。」

曹長「將軍、私に死を下されませ。」

バナナン大將「いいや、ならん。」

特務曹長「けれどもこれから私共は毎日將軍の軍装拝しますごとに烈しく良心に責めら

れなければなりません。」

大将「いいや、今わしは神のみ力を受けて新らしい体操を発明したじや。それは名づけて生産体操となすべきじや。従来の不生産式体操と自ら撰おのずかせんを異にするじや。」

特務曹長「閣下、何とぞその訓練をいただきたくあります。」

大将「ふん。それはもちろんよろしい。いいか。」

では、集れつ。(総すべて号令のごとく行わる。)シヨン。右い習え。直れつ。番号。」

兵士「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、」

兵士伍ごを組む。

大将「前列二歩前へおいつ。偶数ぐうすう一步前へおいつ。」

大将「よろしいか。これから生産体操をはじめめる。第一果樹整枝法せいし、わかつたか。三番。」

兵卒三「わかりました。果樹整枝法であります。」

大将「よろしい。果樹整枝法、その一、ピラミッド、一の号令でこの形をつくる。二で直るいいか」

大将 両腕りょううでを上げ整枝法のピラミッド形をつくる。

大将「いいか。果樹整枝法、その一、ピラミッド。一、よろし。二、よろし、一、二、一、

二、一、やめい。」

大将「いいか次はベース。ベース、一、の号令でこの形をつくる。二で直る。いいか。わかつたか。五番。」

兵卒五「はいつわかりました。ベース。盃^{はいじょう}状^{じょう}仕立^{しだて}であります。」

大将「よろしい。果樹整枝法その二、ベース一。」

兵卒「一、」

大将「二、一、二、一、二、一、二、やめい。」

大将「次は果樹整枝法その三、カンデラール。ここでは二枝カンデラール、U字形をつくる。この時には両^{りょう}肩^{かた}と両腕^{うで}とでUの字になることが要領^{やうりやう}じゃ、徒^{いた}に^{たずら}ここが直角になることは血液^{じゆんかん}循環^{かん}の上^{うへ}からも又^{また}樹液^{じゆんかん}運行^{うんぎん}の上^{うへ}からも必要^{ひつやう}としない。この形になることが要領^{やうりやう}じゃ。わかつたか。六番」

兵卒六「わかりました。カンデラール、U字形であります。」

大将「よろしい。果樹整枝法その三、カンデラール、はじめっ一、二、一、二、一、二、一、二、やめい。」

大将「よろしい。果樹整枝法その四、又その一、水平^{すいへい}コルドン。はじめっ。一、二、一、

二、一、二、一、二、一、やめい。」

大将「次はその又二、直立コルドン。これはこのままでよろしい。ただ呼称だけをを用うる。一、二、一、二、よろしいか。八番。」

兵卒八「直立コルドンであります。」

大将「よろしい。果樹整枝法、その四、又その二、直立コルドン、はじめつ、一、二、一、二、一、二、一、二、一、二、一、やめい。」

大将「次は、エーベンタール、せんじょう扇状仕立、この形をつくる。このエーベンタールのベースとちがう所は手とからだとが一平面内にあることにある。よろしいか。九番。」

兵士九「はいつ。果樹整枝法その五、エーベンタールであります。」

大将「よろしい。果樹整枝法、その五、エーベンタール、はじめつ、一、二、一、二、一、二、一、やめい。」

大将「次は果樹整枝法、その六、たな棚仕立、これは日本に於ておい梨葡萄等の栽培に際して行われるじや。棚をつくる。棚を。わかつたか。十番。」

兵士十「果樹整枝法第六、棚仕立であります。」

大将「よろしい。果樹整枝法第六棚仕立、はじめつ。一」

(兵士ら腕を組み棚をつくる。バナナン大將手籠てかごを持ちてその下を潜くぐりしきりに果実を収む。)

バナナン大將「実に立派じや、この実はみな琥珀こはくでつくつてある。それでいて琥珀のようにおかしな匂においでもない。甘いあまつめたい汁しるでいっぱいじや。新鮮なエステルにみちている。しかもこの宝石は数も多く人をもなやまさないじや。来年もまたみのるじや。ありがた。又この葉の美しいことはまさに黄金きんじや。日光来りて葉緑を照しょう徹てつすれば葉緑黄金を生ずるじや。讚たたうべきかな神よ。」

(將軍籠にくだものを盛りて出いで来る。手帳を出しすばやく何か書きつく、特務曹長に渡わたす、順次列中に渡る、唱うたいつつ行進す。兵士これに続く。)

バナナン大將の行進歌

合唱「いさおかがやく バナナン軍

マルトン原に たむろせど

荒すさびし山河さんがの すべもなく

饑餓きがの 陣しん営えい 日にわたり

夜をもこむれば つわものの

ダムダム弾や 葡萄弾

毒瓦斯どくガスタンクは 恐れねど

うえとつかれを いかにせん。

やむなく食はみし 将軍の

かがやきわたる 勲章と

ひかりまばゆき エボレット

そのまがつみは 録しるされぬ。

あわれ二人の つわものは

責に死なんと したりしに

このとき雲の かなたより

神ははるかに みそなわし

くだしたまえる みめぐみは

新式生産体操ぞ。

ベースピラミッド カンデラブル

またパルメット エーベントール

ことにも二つの コルドンと
 棚の仕立に いたりしに
 ひかりのごとく 降り来し^{くだ}
 天の果実を いかにせん。
 みさかえはあれ かがやきの
 あめとしめりの くろつちに
 みさかえはあれ かがやきの
 あめとしめりの くろつちに。

「

幕。

青空文庫情報

底本：「新編 銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年6月15日発行

1994（平成6）年6月5日13刷

※底本で、「バナナン大将」「バナナン軍団」の「ン」はすべて小書きです。

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年1月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

饑餓陣営

一幕

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 宮沢賢治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>